

2018/12/09

## 「神の本音」

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」(ヘブル 13:8)

よく「旧約聖書の神は恐ろしいが、新約聖書の神は優しい」などというイメージを持つ方がいます。それは、新約聖書では「神の愛」が中心に語られているのに対して、旧約聖書では、神が「怒る」「復讐する」などと表現されているためでしょう。確かに旧約と新約では表現が異なるかもしれませんが、神ご自身が変わったわけでも、神がふたりおられるわけでもありません。

私たちが、昔も今も変わらない神の本音を知れば、表現の違いにとらわれて誤解することはなくなります。神の本音を知るには、イエス・キリストの言動が基準です。なぜなら、旧約は新約の影であると聖書ははっきり語っているからです。(ヘブル 10:1) つまり、旧約聖書は、イエス・キリストを論証するために書かれたものなのです。旧約は新約の影であるということは、イエス様の人々への接し方や言動を通して、神の本音を知り、その本音を通して旧約聖書を読まなくては正しい理解はできません。

たとえば、私が「このばかもの」と言ったら、あなたはどのように感じるでしょうか。「牧師先生は、本当は私の事が嫌いなのだ。本当は私を軽蔑しているのだ。」と受け取るでしょうか。それとも「私たちのために祈り、愛してくださっている先生なのだから、何か深い意味があり、私を愛しての言葉に違いない。」と考えるでしょうか。実際のところ、私の本音は愛にありますので、もし不快な言葉を使ってしまったとしたら、後者のように理解していただければ幸いです。しかし、正しい本音を知らなければ、こんなにも受け取り方に差が出てしまうものなのです。

では神の本音はどこにあるのでしょうか。

### ■昔も今も変わらない

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わる事のない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」(ヘブル 7:24-25)

神の本音は、昔から一貫してとりなしにあります。ところが、人間は皆、人の価値は行いにあると思っているため、罪に対しては罰という価値観を持っています。良いことをしたらごほうびがもらえて、悪いことをしたら罰を受けるのは当然だと思っているのです。しかし、神の価値観は違います。

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」（ヘブル 8:12）

神の本音は、罪とは罰するものではなく、あわれんで助けるものだということです。多くの人は、神と人との関係を、上司と部下のように考え、がんばったらほめてもらえるのだと勘違いしています。しかし、神は、あくまでもとりなしあわれむ方ですから、神と人との関係は、上司と部下ではなく、医者と病人の関係です。神は、私たちの罪を癒そうとする医者なのです。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」（ヘブル 4:16）

病人である私たちが神様に対してできることは、あわれみを受け取って、ただ助けてもらうことだけです。このことが理解できれば、聖書を読み間違えることはありません。神と人の関係は、ただとりなしを受け、あわれみを受けるものであることの証拠が、キリストの十字架です。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰペテロ 2:24）

イエス・キリストは、私たちの罪を背負って十字架に架かり、その打ち傷によって罪は癒されました。「いやされた」の箇所は、ギリシャ語で真理を表す時に使われる表現になっていて、「いやされる」と訳すことができます。罪は病気であるからこそ、いやされることができ、それをいやす医者が神なのです。

## ■エデン追放の真相

アダムとエバがエデンの園を追放されたのは、神が食べるなと命じた木の実を食べた罰だと、一般的には理解されています。そして、その罪の罰として人は死ぬものとなり、神に逆らったアダムは墮落し、その子孫である私たちも罪の性質を受け継いでダメなものになったのだというのが、一般的な解釈です。しかし、神は罪に対して罰など与えず、ただ癒す方であるというなら、この解釈は間違っていることになります。アダムとエバがエデンの園を追放されたことは、どのように解釈すべきなのでしょう。

旧約時代の出来事のいくつかは、新約聖書によって解説されています。Ⅱコリントによると、アダムとエバが罪を犯した理由は、神に逆らったためではなく、蛇によって欺かれたためだとあります。つまり、アダムとエバはだまされたのです。当時の蛇は、今の姿とは異な

り、好感のもてる人間にとっても近い生き物でした。その蛇にだまされて、アダムとエバは食べたら死ぬ実を食べてしまったのです。

聖書が教える罪とは、神と異なる思いを信じることです。人は、悪い行いが罪だと思っ  
ていますが、そうではありません。人は神と一つ思いを持つように造られていたため、神と異なる  
思いを持つと自動的に死ぬのです。

「死」とは神との結びつきを失うことであり、罪から来る「報酬」であると聖書は教えます。  
「報酬」とは、そのようになるとわかっていて受け取るもののことです。もし、第三者が判定  
を下して与える罰であれば、それは「報い」と言われます。つまり、蛇にだまされたとはい  
え、結果として、食べてはいけない実を食べるという神と異なる思いを抱いたことによって、  
自動的に、人は神との結びつきを失って死ぬものとなったのです。

人は神との結びつきを失ったため、神に愛されている自分が見えなくなり、その結果、自  
分の存在の価値がわからなくなり、自分は墮落したダメなものだと思ふようになりました。  
人の目が気になったり、良いものを得ようと自分を高めようとしたりするのは、自分の価値  
がわからない不安の裏返しです。こうして、人は行いという価値で人を判断するようになり  
ました。これが、アダムの罪によって入り込んだ死の姿です。

しかし、人は墮落したのではなく、神との結びつきを失っただけで、私たちの本質は今も  
神に造られた通り、良いものなのです。本質は良いものなのに、悪い状態になっているとい  
うことは、病気ということです。ところが、自分が悪くなったのは墮落だと受け取った人間  
は、頑張っ  
て自分を引き上げよう、良く見せようとするようになりました。アダムとエバは、  
神との結びつきを失った瞬間に、イチジクの葉で自分を良く見せようとし、さらに、神に罪  
を問われると言いついで人のせいにし、自分を高くしようとしました。こうして神から義  
と認めてもらおうとしたのです。

そういう状況を見て、神はエデンの園からふたりを追い出したのです。それは、行いで神  
に近づくことは不可能だと教えるためです。聖書はそれを、自分の力でいのちの木から実を  
取って食べることをないためと教えています。

それは、私たちはダメなものではないからです。ダメなものなら、良くなることによって  
救われるという論理は成り立ちます。しかし、私たちは良きものなので、良くなることによ  
って救われることはありません。私たちが救われる似は、ただ神が差し伸べる手をつかめば  
良いのです。神は、自分の力で救われることはないことを教え、神に助けを乞わせるため  
に、エデンの園を閉鎖したのです。つまり、神がふたりをエデンから追放したのは、救いを  
与えるための神のあわれみなのです。

人は、どんなに自分の力で自分を高くしても、平安を得ることはできません。神は私たち  
の絶望する勇気を待っておられます。絶望とは、自分の力で神に近づくことを放棄すること  
です。絶望して初めて、「神よ。助けてください。」と求めることができ、そうすれば、神が  
私たちを引き上げてくださるのです。私たちが自分の力で自分を引き上げようとする時、そ  
れができるのは神しかいないことを教えるため、神は引き下げようとなさいます。ですから、  
アダムとエバを引き上げるには、エデンの園から追い出す必要があったのです。

行いで神に近づこうとするのは、病院に行って、「私は立派なことができる人間ですから、

病気は治りますよね？」と言うようなものです。そんなことはあり得ません。イエス様は、「私は立派なことができて感謝します」と祈ったパリサイ人ではなく、「何もできない罪人の私をお赦してください」と祈った取税人が義とされると言われました。そして、「重荷を負う者は私のところに来なさい。私が助けてあげよう。」と語っておられます。

罪人に対する神の本音は、癒しあわれむのだという前提がしっかり理解できれば、創世記の出来事も正しく受け取ることができるようになります。

## ■ノアの洪水の真相（創世記 6-7 章）

「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」

（創世記 6:5-7）

ノアの時代、人が悪いことばかりするので神は怒り、人を造ったことを後悔して、洪水を起こして人を滅ぼしたと一般に考えられています。でも、本当に神は人を造ったことを悔やみ、頭にきて滅ぼすことにしたのでしょうか。

聖書は神の靈感によって書かれた神のことばですから、真実です。ただし、旧約聖書はヘブライ語で書かれ、イエス様の時代には、それをギリシャ語に訳した 70 人訳聖書と呼ばれるものを使っていました。つまり、この時代、聖書と言え、70 人訳が前提になっているのです。しかし、今日私たちが使っている旧約聖書は、10 世紀に写本されたヘブライ語聖書を翻訳したものです。同じ箇所が 70 人訳聖書では次のように書かれています。

「神は、地上に罪が増大し、彼らの心が来る日も来る日も苦しんでいるのをご覧になった。それで、神は、地上に人を造ったので、思いをめぐらし考え抜いた。そして神は言われた。『わたしは造った人を地上の面から取り除こう。人から家畜にいたるまで、這うものから空の鳥に至るまで。というのは、これらを造ったことを思いめぐらしたからだ。』」

70 人訳聖書は、ヘブライ語の「ナーハム」を「思いめぐらす」と訳しています。ヘブライ語の「ナーハム」は、「悔やむ、復讐する、恨みを晴らす、あわれむ」などの意味がありますが、「ナーハム」の主語が神である場合は、ほとんど「あわれむ」という意味で使われています。ところが、今日の創世記 6:6-7 の訳はどれも「悔やむ」となっています。つまり、イエス様の時代は「あわれむ」という意味を込めて「思いめぐらす」と訳されていたのですが、ヘブライ語聖書から訳されている今日は、神は人を造ったことを悔やんだのだろうという、人間的な考えで「悔やむ」という訳が採用されているのです。

しかし、創世記 6:5 で、神は人々が罪で苦しむ姿をご覧になり、6 節で、なんとか人を助

けられないだろうかと思いを巡らしておられたと 70 人訳聖書は訳しています。つまり、ノアの箱舟は、神が人を助けようとしたあわれみの話なのです。

「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。」（I ペテロ 3:18-20）

イエス・キリストの十字架の愛は永遠に変わらず、神はもちろんノアの時代も、人々を救おうとお考えになりました。救いとは、神が心のドアを叩くことに応答することです。しかし、この時、神を信じると言ってお答したのは、ノアの家族 8 人だけだったのです。残りの何万人という人々は、信じないほうを選びました。すると、どのようなことが起こると予想されるでしょうか。キリスト教の歴史は迫害の歴史でもあります。心がいつも悪いことに傾く何万人という人々の中で、神を信じるのはノアの家族しかいないという状況になったら、迫害され殺されてしまう可能性もあります。もしそうなったら、神の言葉がこの世から消えてしまいますから、このまま放置することはできません。神は、このことを思い巡らし、ノアの家族を助けるために、大洪水の決心に至ったのです。洪水は、罰ではなく、救いの型なのです。

「そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。」（I ペテロ 3:21）

神は常に人をあわれむ方であり、ノアの洪水は、罪の罰を示した型ではなく、救いを示すバプテスマを示した型なのです。神との結びつきを失った状態が死です。人間は皆死の状態にあり、いくら魂に永遠性があっても、肉体が減びると同時に生きるすべを失います。しかし、死んだ状態にある人間が助かる方法があります。それは、神が差し伸べている御手をつかみ、神に引き上げていただくことです。それを拒否するのは、自ら死を選択したということになります。つまり、人は神に滅ぼされたのではなく、すでに死んだ状態で、むしろ神はそれを救い出そうとしたのです。

神は、滅ぼす方ではなく、救うことしか考えておられません。だからこそ、十字架に自らのいのちを差し出されたのです。ノアの箱舟は救いの型です。

## ■モーセの律法

神は罪に対して罰を与えないというなら、律法を守らなければ罰を与えるとモーセに言わ

れたことは、どのように理解すれば良いのでしょうか。気をつけるべき点は、神は「罰を与える」と言われた時、同時に「助けてほしいと願えばすべて赦す」と語り、罪の癒しのためにいけにえをささげることが教えておられることです。こんな罰があるのでしょうか。これは、私たちが考えているような罰とは違います。

ルールを破ったら赦されることなく制裁を受けるのが罰です。しかし、神は、神に立ち返りさえすれば、その罰を受けなくても良い、どんな違反も絶対に赦すと言っておられます。さらに聖書は、あなたの罪がどんなに赤くても雪のように真っ白にすると教えています。罰を免れるだけでなく、罪があった事実すら帳簿から消去すると言うのです。これでは、誰も責められません。

律法の目的は、キリストに導くための養育係であると、新約聖書で明らかにされています。旧約時代は、十字架が示されていないため、神は人々に警告を与えて神のもとに立ち返るように導いておられるのです。

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3:24)

神が罰を伴う律法を与えたのは、キリストに導くためです。つまり、神の本音は、一貫して私たちをあわれむところにあるのです。旧約聖書には新約聖書よりも神の本音が多く語られています。たとえば、神は洪水の後、「私の計画は、平安を与える契約だ。」と語られました。私たちが誤解することがないように、神はご自分の本音はすべての人をあわれみ、救うところにあるのだと、永遠の契約として私たちに示しておられるのです。神は、人は良いものだから、神に近づくために立派なことをする必要はなく、ただ神に助けを求めれば良いと旧約聖書から変わらずに語り続け、十字架に架かってその思いが偽りではないことを示されました。私たちがあわれもうとするのが、一貫した神の思いなのです。

「エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。どうしてわたしはあなたをアデマのように引き渡すことができようか。どうしてあなたをツェボイムのようにすることができようか。わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。」  
(ホセア 11:8)